

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## コンタクト

2003 (平成15) 年3月15日鑑賞  
＜MBS劇場＞

Data

企画・制作：浅利慶太  
振付スーパーバイザー：古澤勇  
出演：林下友美／下村尊則／高久舞

### 👁️👁️ みどころ

劇団四季のミュージカル『コンタクト』はダンスを主流にした3部のオムニバス形式の物語。ピンクのドレスの貴婦人のストーリーは、ちょっとHで面白い。いろいろと想像すれば、妖しげな場面も浮かんでくる……。そして青いドレスの女、黄色いドレスの女を中心にしたダンスはさすがに見応えあり。しかしストーリー性は少し希薄。まあ見ていて楽しければいいとするか……。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ミュージカル『コンタクト』とは>

ブロードウェイのミュージカル『コンタクト』は、2000年にトニー賞作品賞など、4部門を受賞した作品。

『コンタクト』= (CONTACT) とは、すなわち、人と人のさまざまな「接触」をテーマとしたミュージカル。3話のオムニバス形式で構成され、ダンスをメインにしたミュージカルだ。演出と振付をしたスーザン・ストローマンは、『コンタクト』で、2000年のトニー賞最優秀振付賞、ドラマ・デスク賞等を受賞したのに続いて、2001年、同じく演出・振付を担当した「プロデューサーズ」でも、トニー賞最優秀演出家賞、最優秀振付家賞を受賞した、現在もっとも売れっ子として活躍している演出・振付家だ。

2001年9月、劇団四季は2002年3月末の開演を目指して、日本版『コンタクト』の上演を発表した。このミュージカルのダンスの素晴らしさは新聞記事等で再三目にしてきたが、やっと2003年の3月15日、大阪の「MBS劇場」でこの公演を観ることができた。

## <一枚の絵>

開演前、私は「前後、左右のちょうど真ん中」、というとび切り上等の席に座り、パンフレットを見ながらじっと開演を待っていた。静かな、楽しみの時間だ。今回私の隣の座席に座っているのは、つい先日の3月10日に大学の入学試験の合格発表があったばかりの私の長女。そう、今回は私の娘へのプレゼントを兼ねたミュージカル鑑賞なのだ。

舞台には一枚の大きな絵が飾られている。この絵は中世の森の中で貴婦人がブランコに乗っているもの。タイトルはきっと「ブランコ」あるいは「ブランコと貴婦人」だろうなと思うような絵（本当はフラゴナールという画家が1782年頃に描いた「ブランコ」というタイトルの作品とのことだ）。

若い貴婦人がブランコに乗っているが、足が少し露出しており、何となくちょっと好色ポイ感じ。しかも、私の愛用のオペラグラスでよく見ると、彼女は靴を投げ出そうとしている。そして後ろにはブランコを操っている若い男（召使い）がいる上、ブランコの前（下）には寝そべて彼女を見上げている（彼女の足ないし、スカートの中をのぞいている）男（貴族）がいる。一体これは何だ……。娘を連れてきたものの、教育上よろしくないのでは……。そんな「うぶ」なことは考えないとしても、とにかく何とも「思わせぶり」な絵。これから始まる物語への期待を高めるのに効果的だ。

## <私の好きなミュージカルのタイプ……>

数あるミュージカルの中で、私が一番好きなのは昔の『ウエスト・サイド物語』であり、また『サウンド・オブ・ミュージック』だ。また劇団四季のミュージカルの原点は何といっても『CATS』だが、私が一番好きなのは、『レ・ミゼラブル』、『李香蘭』、そして2003年4月から大阪でも公演される『異国の丘』など。

これらに共通するのは、ダンスはもちろんだが、それ以上に、ストーリー色が強く、いい歌が散りばめられているということだ。

これは逆に言えば、ダンスやショーだけの色彩の強いものや、また『検察側の証人』や『ハムレット』など、セリフだけの演劇は、どちらかという私の好みではないということになる。

## <『コンタクト』の評価>

「ダンスだけ」ということでは、その凄さに圧倒され、ただただ感動したのは、『ロード・オブ・ザ・ダンス』。これは2000年の2月と12月に2回立て続けにみたが、「とにかく圧倒された」の一言。

これに比べれば、『コンタクト』はいかにダンスが素晴らしいとはいえ、『ロード・オブ・ザ・ダンス』とはスケールの大きさが全然違うし、迫力が違う。

また、「ストーリー性」という点から言えば、「コンタクト」のストーリー性はすごく抽象的だ。そもそも「3話のオムニバス形式」ということからしても、1つのストーリーはどうしても「短編モノ」になる。もっとも、「長編モノ」や「歴史モノ」のように、ずっと1つのストーリーが展開されるものではなく、1つのテーマを印象的に表現するオムニバス形式の方がよりインパクトが強いということは当然ありうるし、演出家はそれを狙って製作しているのだから、私が「ケチ」をつける問題でないことは当然。これは、あくまで「好み」の問題だ。

### ＜3つの物語とは・・・＞

『コンタクト』は、パートⅠ「SWINGING」、パートⅡ「DID YOU MOVE?」、パートⅢ「CONTACT」という全く独立した3話から構成されている。

新聞などでいつも強調されているのは、「黄色いドレスの女」だが、これは第3部だけの主人公で、第1部、第2部には全く関係ない。

### ＜パートⅠの興味深いストーリー＞

第1部は、天井からつり下げられたブランコにピンクのドレスの貴婦人が乗り、召使いの男が後ろからこれを操り、前には貴族の男性が寝そべっている場面から始まる。時代は1767年、舞台は森の中の空地とのこと。近くのテーブルにはバスケットがあり、ワインとグラスが置いてある。貴族が彼女を連れて森へピクニックに来て、ブランコで遊んでいるというわけで、開演前に見せられたブランコの絵そのものだ。

パートⅠの登場人物はこの3人だけ。この3人がブランコを操りながらのダンス(?)を展開する。

召使いがブランコを操り、貴婦人はブランコに乗ってさまざまな「ハイ・ポーズ」。そのパトロンと思われるスケベそうな(?)貴族は、ブランコの前に寝そべって、彼女(の足)を見上げたり、時々ツツにキスをしたり……。そして貴婦人がブランコに乗り疲れると、2人はワインを一杯……。召使いはこの間ただじっと待つばかり。しかしここでワインが切れてしまった(貴婦人が意識的にワインを捨ててボトルをからにしてしまった……?)。そこでパトロンの貴族はワインを仕入れてくるために森の中から姿を消した。残ったのは貴婦人と若い召使いの2人だけ。

時代は1767年だから、1789年に起こったフランス革命の少し前。18世紀の貴族社会では、貴族たちは毎日格別することがなく、「いかに暇をつぶして遊ぶか」がテーマだった。だからフラゴナールの「ブランコ」という絵は、貴族のいいオトナ(オッサン?)が、多分「彼女」を森へのピクニック連れ出して丸一日ゆっくりと戯れる生活を描いたすごく現実的な作品なのだ。まあそんな講釈はほどほどでいいだろう。歴史的な背景やその

当時の貴族のオッサンの遊び方はゆっくりと勉強すればわかることだから。

さて、舞台は森の中。ブランコのそばに残ったのは貴族人と若い召使いの男の2人。ここで何かおこるのだろうか……。この『コンタクト』の演出補・振付補であるスコット・テイラー氏は、パンフレットの中で第1部の登場人物3人のキャラクターについて次のように述べている。すなわち、「まず、貴族の男には形式的に洗練された、貴族らしい身のこなし。貴族の女は大きな瞳が表情豊かで、セクシーで陽気で無邪気。召使いは無愛想で嫉妬深く、性欲が強い(笑)」。

ここから導かれる結論はただ1つ。そう、あのかつてのフランスの映画『エマニエル夫人』(シリーズ)で描かれたセクシーな世界の予想だ。しかし、この『コンタクト』はミュージカル。(成人)映画『エマニエル夫人』の世界を、舞台上で、またブランコを用いていかに表現するか……?

ブランコの上で展開される貴族人と召使いのさまざまな動きは、ブランコの流れというゆったりとしたリズムへ中にありながら、かなり濃密なもの。ワイセツ罪になりそうではない、ヒワイそうでそこまではいかぬ、「芸術」的好色さともいべき舞台をつくりあげている。

ただ残念だったのは、今日のキャストでは、この貴婦人は井田安寿ではなく、外国人のジョアン・マニングだったこと。私のイメージでつくっていた井田安寿の「セクシーさ」を見てみたかった……。もっとも観客の90%は女性だから、私の隣に座ってみている娘も含めて、女性の観客たちは私のようなスケベな目で観ていたのかどうかは知る由もないが……。

## <パートⅡ・青いドレスの女>

第2部は1954年、ニューヨーク・クイーンズ区のレストランが舞台。登場人物は青いドレスの女とその夫、そしてここでもこの人妻にチョッカイを出すウェイター長の3人がメインだ。

第2部の圧巻(見どころ)は、何とんでも青いドレスの女を演ずる林下友美のダンスの凄さ。ちょっと年が老けており、女性としての絶対的な魅力には乏しいものの、そのクラシックバレエを含めたダンスの能力には脱帽!

第2部のストーリーは、怖いマフィアの夫が出てくるものの、コメディ風で、コケティッシュな魅力を強調しているが、第1部ほどの興味は湧かない。しかし彼女のダンスだけで良しとしよう。また、第2部でのミュージック・ナンバーは「パール・ギュント組曲」や「アルルの女」など、なじみのクラシック曲が多く、この点でも林下友美にピッタリだ。

## <パートⅢ・黄色いドレスの女>

第3部の物語は結構面白い。舞台は1999年のニューヨーク。下村尊則演ずる広告会社のエリートディレクターのマイケルは、今日は栄えある授賞式。ブロンズ像を片手に大熱演のスピーチだ。

すべての時間とエネルギーを費やして1つの目標に向かって邁進し、本日はその「結果」を目の当たりにした日だから。しかし、その栄光の裏には、絶対に人に知られたくないマイケルの「苦悩」があった……。

授賞式のパーティが終わり、1人マンションへ帰ったマイケルは、大量の睡眠薬を飲み自殺しようとするが……。そして、これは夢かそれとも現実か……。突如、舞台はニューヨークの下町のバーへと移る。この店には毎晩何人も男女が現われ、ただダンスに興じている。そしてそこには、男たちの関心を一身にひきつける1人の黄色いドレスの女がいた。マイケルはダンスなどまるでダメ。しかし次第にマイケルも……。

第3部では数組の男女が素晴らしいダンスを見せるし、そのダンス・ナンバーも実に多彩。大いに楽しめることまちがいなし。

## <総 評>

ストーリー、歌、ダンスの3つがうまくミックスしたミュージカルが一番好きな私にとっては、100点満点の作品ではないものの、十分に楽しむことができた。しかし私にはやはり、2003年5月7日からMBS劇場で公開される『異国の丘』の方がはるかに興味が強い。

実は、『異国の丘』については、2001年10月、東京での初公演の際、わざわざ東京の仕事にくっつけて1人で観に行き、涙をボロボロ流した作品であり、是非大阪でも再度観ようと考え、既にチケットを買ってある。そこで娘に「お前これも行かか？」と聞くと「是非行く行く」とのこと。

劇団四季のミュージカルを通じて、新しい父娘の触れ合いができれば1万円のチケット代は安いもの。そこで早速、娘には、『異国の丘』の原作『夢顔さん』によるしく（上）（下）を必ず買って読んでおくことを約束させた。

5月のMBS劇場での娘との「デート」を楽しみにして、また明日から仕事に励むことにしよう。

2003（平成15）年3月18日記